

西鶴：大矢数について(一)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1988-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1551

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



西鶴 — 大矢数について(一) —

江 本 裕

一 五月興行について

延宝九年(一六八一)四月に『西鶴大矢数』と題して刊行された彼の矢数俳諧四千句の興行は、その前の年、延宝八年五月七日夕刻から翌八日の暮にかけて営まれたものだった。先学の指摘される通りに矢数俳諧は、五月の晴天の日を選んで行われた京都東山の天台宗蓮華王院三十三間堂での通し矢競技に倣うものであるが、西鶴が前回(延宝五年五月二十四日興行の独吟千六百句)に続いて本興行でも五月(傍点筆者。以下も同じ)を選んだのは、上記通し矢競技の五月を享けるものだったと考えられる。三十三間堂での通し矢の記録をたどると明暦二年(一六五六)閏四月二十一日に紀州藩土吉見台右衛門経武が総矢九七六九本中六三四三本を通すと、寛文二年(一六六二)五月二十八日に尾州藩土星野勘左衛門茂則が総矢一〇一二五本を射て六六六六本を通し、以後、延べ五十人の射士が挑戦して、寛文八年五月三日に前掲吉見台右衛門門下の紀州藩土葛西園右衛門弘武が、総矢九〇四二本中七〇七七本を通して師の仇をうった。すると翌寛文九年五月二日に再び勘左衛門が総矢一〇五四二本のうち八〇〇八本を射通してタイトルを奪還し、この記録は貞享三年(一六八六)四月二十六日に紀州藩土和佐大八郎に破られるまで(総矢一〇三五三本、通し矢八一三三本)、十七年間破られなかったとい

う。さながら御三家のうちの紀州と尾州の覇権争いの観を呈するのだがこれが世に喧伝されたであろうことは容易に察せられ、いちはやく明暦四年刊の『京董』（巻二）が挿絵を施して説明するほどだった。そして軽口の俳諧を旨とする西鶴がこの数を競う技芸に目をつけぬ筈はなく、なかでも再度挑んで大記録をたてた星野勘左衛門に強く心を惹かれたであろうことは、「天下の大矢数は星野勘左衛門、其名万天にかくれなし」〔西鶴大句数〕序の言や、『大矢数』第二十七で「星野はいさしらす半分大矢数」の善之発句に「二百五十石早苗とり月」と脇していることなどから、充分に推察されるのである。^{注(1)}

よって西鶴の興行には本家筋の月に当る五月が最もふさわしかったと思われるのだが、それが当初から延宝八年五月と企図されていたかというとは実はそうではなかった。既に野間光辰氏に延宝七年三月二十二日付下里勘兵衛（知足）宛西鶴書簡を用いての詳考が備わるように、西鶴は自身の千六百句独吟を抜いた月松軒紀子の千八百句を再度破るのを、延宝七年の多分五月、しかも句数も三千句を目標にしていた（三月二十二日付で「近々、三千句ののそみ」と言う）。ところがその延宝七年の三月初め（五・六日）に仙台の大淀三千風が一日一夜二千八百の独吟興行を敢行し（三千句を志し、三千風の号もこの興行に拠る）、その戦果はやがて（三月二十二日以後）、西鶴と面識のある仙台出身で在阪中の木村一水を通して、出版依頼を伴いながら西鶴の処に廻ってきた。^{注(2)} 三千風の成果はこの年八月に三冊本で『仙台大矢数』と題して大阪の深江屋から版行されるのであるが、その折西鶴はこの書に跋文と独吟歌仙一卷をおくる熱の入れようである。反面ライバルの菅野谷高政を激しく難じて三千風を慌てさせるのだが、しかしこの時既に西鶴自身は当初の自己の計画を変更して新たに目標を定めていた筈で、それを実現したのが延宝八年五月七日・八日の本『大矢数』となったのである。当初の計画からはぼ一年の遅れとなる。知足に訴え（書簡でも紀子と高政を非難）、他人の出版物までを借りて怒りを爆発させる当時の西鶴の心理状態、また後述するつもりこの時期彼をとりまくある意味では切迫した俳壇状況に鑑みれば、この一年近い延期は少し長いようにも感ずる。むしろこの間に質量ともに他の追隨を許さぬものにするための準備もなされただろうが、一つにはやはり、本家筋である矢数競技の行われる月、五月へのこだわりがあったのではなからうか。もっとも貞享元年の二

万三千五百句の時は六月六日なのだから余りこだわる必要はないのかもしれないが、時好に敏な西鶴とこの興行の重要さを考えると、やはり五月にこだわりたいのである。前田金五郎氏が後述『西鶴大矢数注釈』の解説に紹介される『翁草』（巻二）の星野勘左衛門に関する逸話、即ち寛文九年五月二日八千八筋を射通した勘左衛門は終ると騎馬で京都所司代に届け、その馬を南に向けて島原に赴き、夜とともに酌婦に戯れ酒を飲み、その活気平日のごとくだったので見聞の人美談せずということなかったというエピソードは、「我大矢数諸願成就、次日は松門亭月次の俳諧勤る事」（松門亭は片岡旨恕）と跋文の結びに記して我々を驚嘆させる西鶴の精力に、赴く先こそ違えびつたり一致するではないか。もっとも「大坂中俳諧月次日」（『物種集』巻末）には「九日 天満旨恕 昼会」とあつて右は偶然の一致にすぎぬかもしれないが、西鶴の精力的な活動が勘左衛門のそれに倣うものではなかったと言いきれるかどうか。筆者には、勘左衛門を念頭に置いた演技だったと感ぜられてならない。とするとやはり、『西鶴大矢数』の興行は、五月が最もふさわしいのだった。

二 大矢数の概要

さて、問題の『西鶴大矢数』だが、本書は東京大学総合図書館洒竹文庫に蔵されていた五巻五冊揃いの孤本が関東大震災で焼失して以来、版本の忠実な模写である柳亭仙果の写本等三種の写本しか伝わっていなかった。^{注(4)}ところが昭和五十六年に巻一のみの零本ながら版本が発見されて天理図書館の蔵する処となり、これが同六十一年刊の天理善本叢書『矢数俳諧集』に乾裕幸氏の解説で『紀子大矢数』『仙台大矢数』とともに影印公刊され、その姿を見ることができるようになった。また昭和六十二年には前田金五郎氏の大著『西鶴大矢数注釈』全四巻が完結（勉誠社）、西鶴俳諧の注釈に一画期をもたらした。従来信頼できる校注は定本西鶴全集第十一下（野間光辰氏校注）に収まるものしかなかったのであるが、上記により、西鶴の俳諧並びに矢数俳諧の研究は、よりなされやすくなったと言えよう。筆者も右の学恩に浴しつつ、俳諧師西

鶴の頂点をなす本書を、以下で検討しようとするものである。

『西鶴大矢数』は横本五冊、巻頭に兀々子鬼翁序、巻四末に長大な西鶴跋を付して、延宝九年四月に大阪の深江屋太郎兵衛から版行された。もう少し付け加えると、巻四の西鶴跋の前にも「延宝九^{辛酉}年卯月吉日／大坂呉服町書林深江屋／太郎兵衛板」とあり、更に巻五末に重ねて同旨の刊記がある。刊記が二か所ある理由は、本書が巻四までに各巻百韻十巻ずつの計四千句を収め、巻五に表八句のみを第四十一から百七まで収録するという、その構成上の相違に由来しよう。版元の深江屋は延宝期大阪で最も多くの俳書を出す俳諧書肆で西鶴のものも十作を出しているのだが、前述『仙台大矢数』の版元でもあった。新記録達成者三千風を援け誉めたたえておいて、一年たたぬうちに同じ版元でそれをはるかに凌駕してみせるという仕組である。序者の鬼翁は加藤氏、『生玉万句』等の牧野一得と同人。延宝四年正月の西鶴の歳旦帳『大坂歳旦』に牧野西鬼、同年刊の『古今俳諧師手鑑』に牧野一得西鬼、『百人一句難波色紙』等に加藤鬼翁で出る宗因門であるが、振返れば西鶴の処女編著『生玉万句』で西鶴と共に最大の九句（ただし西鶴には追加の一句が加わる）を出していた人物で、いわば『生玉』成立に最も協力した人。その彼が俳諧師西鶴の著作の頂点たる本書の序を記しているのに接して、筆者にも感慨なしとしない。

ところで上述巻四までの巻頭百韻は次の表八句（執筆も加えた）で始まっていた。

何 泰平

天下矢数二度の大願四千句也

難波西鶴

百六十まい五月雨の雲

堀山保友

郭公八わりましの名を上て

西山梅翁

さはる所かき、医者の山

松雪軒大鶴

酒の漣絶すとふたり坐敷もち

谷 木因

岩か根まくら寝た事かない

在原萍々子

朝はうつら昼は紅葉に夜るは月

安川孤松

京にもあるまい目の前の秋

松樂軒鶴爪

染出しの替る所をうつ衣

執筆

第二以下は脇を西鶴が付けながら、この体裁で第四十まで続くのである。「天下矢数」はひろん天下第一の矢数俳諧をねらう意で、「二度の大願」は最初に記録を作った三年前の『大句数』千六百句独吟に続く再度の挑戦を意味する。脇の梶山保友は松山玖也亡き現在い（延宝四年没）は大坂俳壇の最長老といってよく、重要な第三は師の西山宗因である。最長老と師を迎え（または句をおくられ）、「八人の執筆五人の指合見座すれば、数千人の聴衆庫裏・方丈・客殿・廊下を轟」（跋文）かす中で吟唱する西鶴の面目、推して余りある。第四の大鶴と第八の鶴爪は『大坂歳旦』の巻頭三物で西鶴の発句に続いて脇（鶴爪）と第三（大鶴）を受けもった人。大鶴は『物種集』に井原姓で出ることなどあって西鶴の縁戚かと言われ（野間光辰氏『年譜考証』）、鶴爪は上掲『大坂歳旦』の西鶴発句「春のはつの坊主へんてつもなし留」に対し「自由にあそばせ誹諧は花」と脇した人だった。西鶴句は彼の法体を示す最初の資料で、鶴爪の脇もこの時西鶴が隠居していたことを示唆する貴重な資料なのだが、いずれにしても上記二名は西鶴にきわめて近い人物だったと推定される。『大矢数』巻頭表八句は、最長老と師、それに身近な人物を配していたことになる。谷木因と安川孤松は美濃の俳人。なかでも木因は延宝六年頃から急速に親しくなった人物で、同七年刊の『二葉集』には十組もの付合が入集していた。彼等は大阪以外の地を代表する形で出座していたか。萍々子は未詳。因みに記せば、第二の発句と第三は水守重直（物種2、二葉6、百人一句難波色紙）と井口如貞、第三は岩井武仙と前川由平だった。

しかし、右にもまして華やか、というよりはそれを通りこしてやや仰々しいとでも言えそうなのが、総勢五十五人に及ぶ「大矢数役人」であった。煩しくもあるが次にそれを示す（表一）。

表(一) 大矢数役人

執筆	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	脇座	〃	〃	〃	〃	指合見	役割	
水田桜山子	斎藤 賀子	岩崎 豊流	水野 梅吟	山口 清勝	高木 松意	青木 友雪	田中 柳翠	秋田 桂葉	藤田 不琢	木原 宗円	岡西 惟中	高滝 益翁	前川 由平	小西 来山	浅沼 宗貞	片岡 旨恕	和氣 遠舟	人名
		豊春		〇	〇	〇			〇				〇				〇	生玉哥仙
				〇	〇	〇			〇				〇				〇	一独吟大坂古今
〇	〇	同上											〇		〇		〇	歳旦手鑑
〇	〇	同上		〇	〇		〇		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	物種一葉山海
〇	〇	同上		〇	〇	〇	〇		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一百人
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三津高名
〇								〇		〇	〇	〇	〇	〇		〇	〇	
線香見	〃	目付木	番紙	金幣	銀幣	紅幣	白幣	番筆	執筆	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	執筆	役割
池山西戎	岩田西里	山田西長	吉田風鶴	衣笠一鶴	山洞軒一水	岩井武仙	木村西虎	松井西花	岡本西住	松嵐軒西毛	辻尾意榮	金谷宗及	原松林	天引親延	西村元重	田中定方	柳葉軒霧流	人名
			常類			〇												生玉哥仙
			同上			〇												一独吟大坂古今
	〇	〇	〇	〇		〇	〇	〇	?									歳旦手鑑
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇		〇	〇					〇		物種二葉山海
〇						〇	〇			〇	〇							一百人
																		三津高名

役割	人 名	線香見	割帳付	〃	懷紙台	〃	懷紙	掛役紙	〃	支御配影	〃	代 参
	人 名	松井 悦重	齋藤 幸船	下山 和風	岡山 一風	原 如雲	栗野 友知	吉田 西可	霧川 生重	小松 元知	井田 西用	
	生玉哥仙			○心入								
	独吟大坂古今			○同上								
	旦手鑑											
	物種二葉山海								○			
	百人一句											
	三津高名											
役割	人 名	代 参	〃	醫師	〃	後座	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	野口 西言	上柳 西信		横地 祐菴	山本 祐竹	积 西波	高石 石斎	覆並 貞因	积 祖寛	関土 西厂		
	生玉哥仙							○				
	独吟大坂古今							○				
	旦手鑑							○				
	物種二葉山海							○				
	百人一句							○				
	三津高名							○				

役柄については逐次説明しないが医師二名を置くなどはまさにスポーツ、ボクシングなみである。月松軒紀子の千八百句独吟興行を「執筆もなし、判者もなし」(『仙台大矢数』の西鶴跋)と難じた手前もあるかもしれぬが、二千八百の『仙台大矢数』の役人数が七名(金幣・銀幣各1、箭取ハ判者のこと)であるのに比しても、役割の細分化ともども、いささか度を越した感がある。指合見は判者で作法吟味役、脇座は文台の脇に座る役でいわば招待客といった処。また最後の後座は後見役である。後座にばらつきがあるものの、上記三役の二十二名と他三十三名に格差のあることは、表示した西鶴編著への入集状況を見るだけでも歴然だろう。試みに『物種集』に付される「大坂中俳諧月次日」を見ると遠舟・旨恕・賛也(八宗貞)・由平・以仙(益翁)・惟中・宗円・柳翠・友雪の九名が入り、延宝七年刊『難波鶴』の「俳諧点者」の項には遠舟・旨恕・宗貞・由平・益翁・惟中・松意・友雪の八名が入る。入らぬ者の中で脇座の桂葉は出羽秋田の俳人、

指合見の小西来山は飯田正一氏の「来山年譜」(『小西来山全集』後篇、朝陽学院・昭和60)によると延宝四年頃の立机と推定され、表(一)でも『物種集』が初出である。しかし同八年には歳旦帳を出しており(下垣内和人氏編延宝八年版『歳旦集』勉誠社文庫・昭和62)、将来を嘱望された新進という格だろう。また山口清勝には早くに撰集があり(寛文十一年刊『蛙井集』、斎藤禾刀の子賀子、岩崎豊流にしても門戸を張っていた筈である。鳥瞰的に言えば三都から三十六人を選ぶ『俳諧三ヶ津』と全国から六十六人を入れる『高名集』に入る者の多い指合見の格がやや上か。いずれにしてもこの指合見と脇座連は、大阪(桂葉を除く)で立派に門戸を張る現役同業者に対する、おのれの晴舞台への招待という感が深い。後座もほぼ同様であろうが、石齋・貞因の俳歴、また『百人一句難波色紙』の祖寛と西厂の肖像等から見て、上記二者よりは年配格と考えられる。

対して、執筆以下の三十三名は完全に実働部隊だった。その中でも執筆番繰以下は岩井武仙・山洞軒一水(仙台の人)等ごく少数を除いて西鶴直系の新人または無名俳人と考えてよく、それは表示の入集状況にみごとにあらわれている。入集を見る者でも殆どが二年前の『物種集』以後である。^{注⑥}しかしてやや事情を異にするのが執筆で、水田桜山子は西吟のこゝと、辻尾意業は延宝三年刊の『大坂独吟集』に「意業」で百韻が入集、同七年刊の『銀葉夷歌集』(狂歌)に七首入集、また『山海集』に江林、『百人一句難波色紙』に辻尾江林が入り、『難波鶴』の「執筆」の項に辻尾太右衛門で入る人物だろうと推定されている(乾裕幸氏「大坂独吟集の研究」△『俳諧師西鶴』、前田書店・昭和54)。天引親延も『難波鶴』の同項に天引平右衛門で出、彼は同書の「算者」にも見えて算術の方でも優れていたと思われるのであるが、早く寛文六年刊『遠近集』の跋にも署名があった。また「大坂俳諧月次日」には前述意業と共に「松林」(原松林と考えてよいだろう)が載り、同じ執筆者の伊藤長右衛門道清が連歌をたしなんでいることなども考え併せると、^{注⑦}当時のこの職業には単にそれのみにとどまらぬ者の多いことが知られるのである。ついでに記しておく、執筆に名を見る田中定方と御影支配の鶴川生重は、歌舞伎の立役田中治右衛門と大立者大和屋甚兵衛である。

以上をまとめると、著名俳士が控え実働部隊が走り、梨園の人気役者が彩りを添える。「難波の大寺晚鐘告て、十二の大蟻燭次第に立のほれば、天も酔り」とは西鶴の跋文であるが、そんな中で行われた本興行は、まさに大向うをねらった一大イベントであった。そして、西鶴をしてかく派手に示威させる理由もかなり切迫してあったと思うのであるが、その件に関してはもう少し後に譲る。

三 大矢数の内容

先述のごとく『西鶴大矢数』は巻四までと巻五の二様に分れているのであるが、そのうちの前者の百韻四十は、各八句が他者に委ねられていた。一昼夜四千句で一句の持ち時間を約二十秒とすると、表八句の作者の連繋がうまくいかぬと滞りが生じる。「日を重ねて（作っておいて）即座の作にもてなし」（跋文）と他を非難するのであるが、本興行においてはすべてが当座の作であったかどうか、問題となる処である。それは暫く置いて当面出句者の数を整理しておく、第一から四十までに出句する者は二七四名である（二句以上の者もいる）。うち二十四名が役人にも名を連ねている。ついでに第四十一から百七までを記すと四五二名（表八句のうち脇のみが西鶴）。うち役人をつとめる者十一名、巻四十までに出句している者二十七名。以上をまとめると、延べ人数では役人五十五名、第四十までが二七四名、四十一以後四五二名、合計七八一名。重複を引いて実質を示すと、役人五十五名、第四十まで二五〇名、四十一以後四一四名、合計は七一九名となる。後述のごとく句だけおっくつて出座していない者もかなりいると思われるので割引かねばならぬが、しかしともかくその日の動員数は空前だったと考えられ、当夜の生玉境内が異様な興奮に包まれたことは、まず間違いなかっただろう。百歩譲って出座の数が上記より大分少なかったとしても、七百人を越える人士から句を集めた西鶴の情熱（あるいは執念、エネルギー）だけでも、驚嘆に値する。

さて、本興行の実際について野間光辰氏は、西鶴が興行成就直後の六月二十二日に下里勘州（知足）に送った書簡に見える「其元より被遣候御一句共加入申候」や「めい／＼一句つゝ入申候」の文言を手がかりに、『大矢数』に出句している者すべてが当日出座しているとは限らぬことを指摘された上で（知足の句が吉親の号で第百一に出る）、各百韻の表八句は西鶴が何か月も前から在阪の俳諧師や全国の俳友に檄をとばして求め用意していたであろうこと、そして当日そのうちの四十だけを用以残余のものを割愛するに忍びずこれを巻五に収めたのだろうと推定された『年譜考証』。西鶴自身は本書の按配について何も記してはず、かつ矢数俳諧集出版の例も少ないのでその実態については不分明な処が多いのだが、本興行並びに本書成立の経緯はほぼ野間氏の推定通りではなかったかと思われる。しかしそれにしても巻四末に満願成就の祝賀が何も付されていないのはなぜだろうか。この前の『大句数』は下巻が伝存しないゆえ全く不明ながら、紀子の『大矢数 千八百韻』には自身のものにせよ「竹歌仙」一卷が付され、三千風の『仙台大矢数』には祝賀の歌仙一卷に、更に西鶴の賛跋と独吟歌仙一卷（発句「ひろまるや三千世界随一花」、揚句「行方自由仙台の作」）が付されていた。対して『西鶴大矢数』の第四十は、「葉喰や三つあるしゝ（鹿）」を目に懸て 守由／毎年をこる山は霜腹 西鶴の冬季で始まり、「これまでの花は奢の難波鶴／長き日の出や何れもの影」で揚げられているだけで成就の喜びなど全く見えず、このあとに既掲の深江屋の刊記が載るだけである。

そこで巻五に目を転ずると、表八句のみとはいえ百韻六十七の数は残余にしてはいかにも多すぎるのではないかとまずその量が気になる。ならばと最後の第百七を見ると、「鬼神も下馬鶴の羽音そ大矢数」の（鴻池）西六の発句に始まり、第三を伊丹の宗旦がつとめ、八句目は「国は治る一天の秋」（初子）で結ばれ、立派に祝賀となっているのである。

射たりや与市それは礪也大矢数 栄久

あの達者千句の鬼也大矢数 西森

管城やおさむる手には大矢数 難平

誰歎跡四千に止とどにあり大矢数 坂上

及もなし息の根とめる大矢数 荷平

鬼神も下馬鶴の羽音ぞ大矢数 西六

右は、結び近くで「大矢数」が連続して用いられる、第百二から百七までの発句である（「大矢数」は五巻全体で十五回入ただし第一の「天下矢数」を入れる√用いられる）。そして以上を見ると、すべてが詠者に対する褒意を持つこと、一読して明らかだろう。しかも巻頭の西鶴の発句「天下矢数二度の大願四千句也」とも、みごとに照応しているのである。

古典（百二の「与市」）や漢籍（百五の「止」は『大字』に拠る）を用いながら、それが「息の根とめる」となり、最後の「鬼神も鶴の羽音に下馬」と漸層的に高められていく西鶴賛美。しかも百七の八句目は「国は治る一天の秋」で結ばれていた。ここから読者は西鶴への祝意・賛仰を容易に読みとることができただろう。巻五はそういう意をこめて編成されていたのだった。とすれば一巻すべてが祝賀の巻になるわけで、例を見ないスケールの大きさである。百七までの表八句分が当初から用意されていたものかどうかは速断できぬが、右は残余を割愛するに忍びずではなく、誇示のためのストックであったと思われるのである。

ならば、『大矢数』の俳諧としての内実はどうなのか。乾裕幸氏は前掲『矢数俳諧集』の解説で収録三書の各第十五を抽出して詳しく作法と展開の仕方を比較され、時間的な余裕は少ないにかかわらず西鶴の方がはるかに作法にかなひ、かつ展開とことばの働かせ方においても、玄人ブコの味わいが深いと言われる。指摘される処逐条納得でき、それこそプロの眼を痛感するのであるが、筆者はともかく表八句に限って通覧してみた。もつとも表八句は脇を除くと西鶴のものではなく、従って西鶴とは直接結び付かない。ただ野間氏の推定等に少しでもかかわればと考えてである。なお季の認定には前田金五郎氏の著を参照させていただいた。

まず気になったことを記すと、脇が発句と同季でないものが三例ある。

とれか驚そ佐野のわたりの夕詠め 松野軒 西虎

駒とめて今二の足をふむ 西鶴

(第九)

近江路や木曾殿も召す夏羽織 重政

駒のかしらも見えぬ編笠 西鶴

(第六十六)

及もなし息の根とめる大矢数 荷平

雲つかひ出す仙術の岑 西鶴

(第百六)

付筋は一見明らかだが、冬一雑、夏一雑、夏一雑である。次に春・秋が一句また二句にとどまっている例。

筆とめて甫之も詠ん難波の花 之良

民の竈は炉の名残今 西鶴

店引る徳利の中や酌ぬらん 鶴翅

(第八十一)

浪の鱗海にも花や桜鯛 正利

春日をあらふまな板か迫門 西鶴

曳すつる雲の破れに粘を付て 磯風

(第九十一)

わなをかくれは横雲を引 一之

夜咄しの肴といへは野辺の月、

泉菊

下に置たまはす立てまふ也

重久

(第四十八6〜8)

前二者は第三が雑、三例目は七句目(月の定座)のみが秋である。次の例は夏が四句続く。

其流れ朱印のすはつた清水也

友麿

茂る柳生のゆるしをつかふて

時次

夏の月どこに捨てても一万石

西夏

上々諸白きく郭公、

西音

(第五十五5〜8)

その他、第四十一は表八句に月が出ず、第七の三「釈迦御免東の板付たつてきて閑睡庵月山」は初表に釈教を出すと

えよう。また「雑」の多く続きすぎる例も目立つ。第四十九は表八句が夏二句と雑六句。三十六は夏三句と雑五句。この

百韻は発句から第三までが夏期で、あと初裏の八句目まで、十三句雑が続いていて、いたくバランスを欠いている。

今度は視点を変え、『大矢数』各百韻の発句の季の分布を見てみた。

春―49 (第四十まで14、四十一以後35)

夏―43 (第四十まで17、四十一以後26)

秋―6 (第四十まで1、四十一以後5)

冬―9 (第四十まで7、四十一以後2)

以上を見るに、さすが当季だけあって夏が多いことに気付く。しかも第四十までに限ると春を抜いて最も多く、冬の例にしても、四十までとそれ以後では微妙に違う。秋が少ないのは初表七句目に月の定座があるためだろうが、それに

も秋が四十までに一句しかなく逆に冬が七対二となっていることは、連句を編んでいく上での配慮の有無とかかわっているような気がする。少なくとも四十までとそれ以後では、発句の季の配し方に違いがあるように思う。さて当季である夏の季語はどうなっているだろうか。全体で四十三の夏季のうち、「大矢数」と「時鳥」（郭公、88は「飛鳴行く鳥」）が各十五回用いられ、この二語で約七割を占める。他の十三句は螢の三句が目につく程度で、葎茂る、扇、卯花、とこし苗、夕顔、更衣、夏羽織、坊主麦、青竹、蟬が各一句ずつ。本興行が矢数俳諧で当月が時鳥とは言い条、変化の乏しさは否めない。その点では執筆四十句のうち当季たる夏が二句しかないことも注意を惹く。むろん七句目が月の定座で、従って秋季が二十四句と群を抜くのは当然だが（あとは雑が14）、四十までに月の引上げは十八回行われており（ただし六句目7、五句目6、四句目3、三句目2）、ここにはもう少し夏季があってもよかつただろう。初表月の定座の引上げに関しては四十一以後では二十六回。四十までの四割三分に対して二割六分とかなり少ない。しかし後者では発句に三、脇に一、第三に二句あり、ここでは両者はきわだった対照を示す。

更に試みに、各句相互の季語の連関を、春季（発句―第三）と秋季の月の句前後で一覽してみた。結果は表(二)に示すごとくであるが、断っておかねばならないのは、前述のごとく表八句は西鶴と殆どかわらないことと、各句間の季語の繋りがかりに単純平板であつても、「富士の煙を茶釜に見立てる」ごとく、そこから飛翔するのが談林の特徴と言われていることである。そして如上を一応弁えながらも、表示の結果にはやはりある驚きを禁じ得なかつた。表(二)には見出しに示さなかつた「霞」「雪解」なども入っているが、この二者は第三に多いのが特徴である（「霞」は533にも、「雪解」は733、823、863にもある）。さて表(二)の例示数は三十一。春季の発句は全部で四十九だつたから、上の数はその六割三分を占めることになる。そして右の事実は先の断りがあるとはいうものの、矢数俳諧が、花(花盛)、春(春宵)、桜(桜鯛)、霞等の、ごく一般的常識的な季語を鍵にして展開していることを示そう。むろん以上は「咄しの種花そ昔の曾魯離か居は／御前の景色晒ふ山口／とう忘れ春の囃子に罷出て」（『西鶴大句数』第五）にも共通し、確かめてはいないが『仙台大矢

表(三) 月の句前後に露・霧(露)のつく例

二七	有明秋	露	露玉	六九	厂	霧	月	二〇三	月	色	霧
二六	月	露	稻葉	六八	秋	月	露	一〇二	(雑)	月	露
二五	月	野山の色	夕露	六四	月	秋風	霧	一〇二	(雑)	月	露
二三	月	色づく	露	五八	月	露	秋の霜	九九	(雑)	月	露
二二	月	秋	露	五六	(雑)	月	露	九七	月	露	秋の霜
二一	月	白露	散柳	五三	(雑)	月	露	九六	月	露	霧
一四	月	露	散柳	四七	月人	露	秋の花	九二	秋	露	浪の月
一三	秋の月	霧烟	露	四六	月	露	(雑)	八六	月	霧	(雑)
一二	月	霧	露	四三	月	露	(雑)	八五	月	露	(雑)
一一	月	露	薦	四二	月	鹿	霧	七九	月	露	躍
九	秋の月	薦	露	三八	朝の月	露	秋	七八	月	露	(雑)
七	月	露時雨	紅葉	三五	月	散柳	白露	七六	月	霧	秋風
六	月	霧	露	三三	月	秋雨	露	七五	月	風の秋	霧
三	月	秋の夕暮	露時雨	三一	かつら男	霧	秋の風	七三	月	色づく	露の玉

あてはまった。『大矢数』表八句全百七のうち月を秋で出すのは九十六で、表(三)に示すのは四十一例である(約四割三分)。これに「秋」と繋る例へ月―秋をを加えると七割になる)。第四十までと四十一以後でのそれぞれの占める割合は大差ないが、ここでも前者に「紅葉」「散柳」「薦」「野辺の山色」等が介在しているのに対し、後者の月と露、ないしは月と露

と雑の結びつきの強いが目立つ。というより、かなりの程度でパターン化している。以上は白と黒が識別されるような明確な相違ではないが、しかし確かに第四十までとそれ以後では呼吸に違いが認められる。これをどう考えたらよいのだろうか。

筆者はここまでに『西鶴大矢数』の季別の分布から始めて、月の定座引上げの実状、春の発句―第三、月の句前後の連関等を見てきた。そして如上から第四十までとそれ以後で、微妙ながら相違があると言った。野間氏の言われたごとく表八句の相当程度がやはり準備されていたごとくである。と言っても、その用意の仕方が問題である。ある百韻の表八句を一連の衆で用意する場合ならそれはそれで一つのまとまりができ、独自の風も出し得るだろう。まだ確かめていないが、『大矢数』には確かに、「梅吟子・友吟・松吟・葉吟・宗吟」(29)、「恋舟・帆船・由香・冬貞・吉也」(32)、遠舟系の役者)、「来山・園山・素山・色山・風山・呑山」(41)、『来山全集』には見えぬが来山門と考えられる)。「重行・立花・建辰か〱寿・生重」(46、役者)、「良盛・良職・良深・良専」(66)など一連と考えられる連衆の名を見出す。しかし一方で西鶴自身が下里知足に、「其元より被遣候御句」、「めい〱ニ、句、つ、つ」とも言っていた。事は面倒で今はこれ以上言えぬが、やはり事前に用意するとすれば、使う方が使いやすいように、いつてみればどのようにも処置できそうな、無難な仕立ての句をおくるのではなからうか。それが実際の興行に用いられた場合はその場に依じてある程度手直しされ、使われなかったものはさほど手を加えずに載せられた。それが(二)(三)の表にあらわれたと考えるのである。もし右の言が幾分かでも首肯されるなら、西鶴は事前に相応の準備をしていたことになりそれは西鶴の自信のなさや安全対策からではなく、むしろ彼の本興行にかけた並々ならぬ決意の発露にはかならずと考えるべきだろう。

以下、西鶴に決意させた当時の俳壇状況や出句した俳人の確認など、積み残しの課題が多くあるのだが、公事・私事にわたり時間に余裕がなく、甚だ遺憾とするがあとと次号で考えることにする。途中で終わったことに御寛恕を願う次第である。

注(1)

寛文二年五月の初度の記録で勘左衛門は五百石に加増されており、ここでは前句の「半分」を受けて「二百五十石」とする(前田金五郎氏『西鶴大矢数注釈』)。ただし西鶴は貞享三年十一月刊の『本朝二十不孝』巻五―二で、「星野勘左衛門・和佐大八」と、勘左衛門の記録を破る和佐大八郎にも及んでいる。

注(2)

野間光辰氏『補西鶴年譜考証』(中央公論社・昭和58)延宝七年の条。以下に引用の時は『年譜考証』と略記する。

注(3)

岡本勝氏『大淀三千風研究』(桜楓社・昭和46)の推定。

注(4)

他は雅楽堂写本と三面子写本。上記の内前者は近世文学資料類従『古俳諧編』31(田中善信氏解説)に影印、また仙果本はマイクロフィッシュ版『洒竹文庫連歌俳諧集成』に入る。

注(5)

執筆番線の岡本西住はあるいは『物種集』に岡本西任で一組入り、『点滴集』に「南都西任」で十五句入る西任の誤りか。また粟野友知は『太夫桜』に「灘住」で入る「友知」と同一人か。

注(6)

拙稿「生玉万句追考」(『国学院雑誌』昭和62・6)等参照。